

## ＜第3分科会＞

### 「成果指標の設定と評価を要点とする食育推進の取組」

指導助言者 柏原市立玉手小学校  
校長 中山 正実

#### 1 はじめに

急速な社会の発展に伴い、ライフスタイルや価値観の多様化が進み、児童を取り巻く状況は著しく変化を遂げている。児童の食に関する状況も同様に急激な変化を遂げ、偏った栄養摂取や朝食の欠食など食習慣の乱れ等が問題になっている。学習指導要領においても、「学校における食育の推進」が総則に位置付けられ、栄養教諭が中核となり学校給食を活用した食に関する指導を充実させることが明記されている。また、給食だけではなく教科等横断的な視点に立ち、食に関する指導の全体計画と関連付けながら効果的な指導を行うことが求められている。今回のように、栄養教諭が担任等と協力し合い、PDCAサイクルに基づいた食育の評価を行い、さらに取組みを進めていくことは大変効果的で意義のある実践だといえる。

#### 2 取組みについて

まず、取組みに当たって学校で位置付けられた食育部、人権部、学年、食育推進委員会で丁寧に話し合わせ、学校全体の課題として進められている。食育の推進は一部の教員の思いだけではなく全体で進めていくことが大きな推進力となるため、大変重要なポイントだと考えられる。その中で、学校の課題が話し合わせ、食生活の乱れ、食事マナー、地場産野菜の認知の3つのうち、食事マナーと地場産野菜の認知についてさらに丁寧に取り組むことによって、「児童がより良い食習慣を実践するようになる」ことを目標とし、6つの食育の視点のうち「食文化」を重点項目とされ、食育に取り組まれた。

取組み内容としては、教科と関連して国語科、家庭科、外国語科など教科を横断した取組みがなされ、行事食や季節の料理、旬の食材など幅広い実践となっている。また、給食中も郷土料理の紹介動画を視聴させたり、デジタル日めくり等で指導をしたりするなど工夫を凝らした実践が行われた。栄養教諭の専門性を発揮し、ICTも活用しながら担任とティームティーチングを行うことで、さらに児童の興味を引き出させていることがうかがえ、担任だけではできない多岐にわたった取組みといえる。

取組みの評価として、当初設けられた10項目の成果指標と、5つの活動指標に基づき振り返りがしっかりと行われている。教員や児童だけではなく保護者にもアンケートを行い、振り返りをして評価されていることは次の改善へとつながっていく。今回教員へのアンケートに比べて児童のアンケート結果が想定していたほど良い結果が出なかったことは、成果と課題でも述べられているように、「1回めと比較して」という事を明確にしていなかったことやアンケートの時期にも影響されたのかもしれないが、食習慣の変容には非常に時間がかかるということも考えられる。学校では変化があるように見えても学校だけでなく家庭での食事については家庭の協力が不可欠であるため、効果が出るには時間がかかるのかもしれない。また、動画視聴の実施率が低かった要因としては、給食の際の取組みは時間の無い中で行われているため、教員も児童も時間に追われ、十分な時間をとれなかったということが考えられる。せっかくの有効な取組みも、時間が保障されていないと根付きにくい。また、児童は食べながら視聴するというのも難しかったのかもしれない。時間を保障することと、さらに短いスパンでPDCAサイクルを使い、定期的に振り返りを行い、修正していくことが有効だと考えられる。

#### 3 おわりに

今回の取組みをきっかけに、食育への理解が進んできていると感じられる。この振り返りを活かし、さらに活動を充実させ継続することによって、最後に振り返っておられるように、児童が生涯にわたって健全な食生活を送ることにつながると考えている。今後、更なる前進が楽しみである。